

# 戦時中の奉仕活動を偲んで

川崎市麻生区

坪木良雄（高土村飯田出身）

久振りに故郷へ帰り高校時代の友人の車に乗せて貰い、思い出多きあちこちを見学させて頂いた。その行く先々に六十年余年前の情景を具に偲ぶことができた。広々とした頸城平野の田園風景は真に整然と耕地整理され、昔と一変していたことにつづく感嘆させられました。道路もかつての砂利道ではなく、農道までもが舗装され、大変便利になりました。集落を通るたびに昔の何処の集落だったか全く見当がつかないことばかりでありました。また冬には雪道をトボトボと歩いた集落と集落の沖合いも子供の頃には物凄く遠く感じられたが今では手に取るように近く感じられました。

そのようなことを連想しながら確か小学校五、六年生だった頃、出征兵士の留守宅へ勤労奉仕として農家の手伝いに行った時のことがつい先日のようです。

するたびに区画を一園から順次増して確か十二から十三園までありましたが、私達はそのうちの七園あたりを割当てられて一生懸命に畦り小さな手に血マメを作って協力したことが思い出の一つです。何十町歩もの広い面積だったので大変な労力が必要としたでしょう。しかし、心残りには葡萄がたわわに熟れた収穫期には頼まれなかったことが子供心に残念でなりませんでした。



日がな一日の野良仕事であつても昼時のご馳走として白いご飯を腹一杯食べさせて頂いたことが夢のようです。また今こそ旧高土村北方にある岩の原葡萄園では生食用は勿論、ワイン、ジュース等の加工品を始めとする数々の製品が世に送り出されていますが、戦時中は軍需産業の一貫として葡萄から電波探知機に利用される酒石酸を採るとかで葡萄を多量に生産しなければならなかったようです。しかし、戦時中のこととて働き盛りの若い男の人は皆兵隊に徴用されているため、労働力不足の補充として小学校の高学年が動員されたのです。その奉仕活動はというと葡萄の根の生長を促すため、葡萄棚の下の土を中耕することでした。皆ほとんど農家の子供であるため、自宅の鞆を持参して手伝った記憶があります。

その頃の葡萄園は山を切り拓いて拡張

